武蔵野日曜聖書講筵

平安何処にか在る
――エレミヤ記第5章10節～6章30節――

１９７４年４月７日
小池辰雄

神の火の如き言　超イズム　火と光　神の審判の火　我は四大なり　偽りの預言者といい加減な祭司ばっかり　エレミヤは売国奴みたいに思われる　神言常燃の霊止　聖霊の火が常燃するところに平安あり

【エレミヤ5】

10 汝等その石垣にのぼりて滅ぼせ されど悉くはこれを滅ぼす勿れ その枝を截除け エホバのものに有らざればなり 11 イスラエルの家とユダの家は大に我に悖るなりとエホバいいたもう 12 彼等はエホバを認めずしていう エホバはある者にあらず 災われらに来らじ 我儕剣と饑饉をも見ざるべし 13 預言者は風となり 言はかれらの衷にあらず 斯彼らになるべしと

14 故に万軍の神エホバかくいいたもう 汝等この言を語うにより視よ われ汝の口にある我言を火となし 此民を薪となさん その火彼らを焚尽すべし 15 エホバいい給う イスラエルの家よみよ 我遠き国人をなんじらに来らしめん 其国は強くまた古き国なり 汝等その言をしらず 其語ることをも暁らざるなり 16 その箙は啓きたる墓のごとし 彼らはみな勇士なり 17 彼らは汝の穡れたる物と汝の糧食を食い 汝の子 女を食い 汝の羊と牛を食い 汝の葡萄の樹と無花果の樹を食い また剣をもて汝の頼むところの堅き邑を滅ぼさん 18 されど其時われることごとくは汝を滅ぼさじとエホバいいたもう

19 汝等何ゆえにわれらの神エホバ此等の諸のことを我儕になしたもうやといわば 汝かれらに答うべし 汝ら我をすて汝らの地に於て異なる神に奉えしごとく汝らのものにあらざる地に於て異邦人につかうべしと

20 汝これをヤコブの家にのべ またこれをユダに示していえ 21 愚かにして了知なく 目あれども見えず 耳あれども聞こえざる民よこれをきけ 22 エホバいい給う 汝等われを畏れざるか 我前に戦慄かざるか 我は沙を置きて海の界となし これを永遠の限界となし 踰ることをえざらしむ 其浪さかまきいたるも勝つことあたわず 澎湃もこれを踰るあたわざるなり 23 然るにこの民は背き且悖れる心あり 既に背きて去れり 24 彼らはまた我儕に雨をあたえて秋の雨と

春の雨を時にしたがいて下し 我儕のために收穫の時節を定め給える我神エホバを畏るべしと其心にいわざるなり 25汝等の愆はこれらの事を退け 汝等の罪は嘉物を汝らに来らしめざりき 26我民のうちに悪者あり 網を張る者のごとくに身をかがめてうかがい 罟を置きて人をとらう 27樊籠に鳥の盈つるがごとく不義の財彼らの家に充つ この故に彼らは大いなる者となり富める者となる 28彼らは肥て光沢あり 其悪き行は甚し 彼らは訟をたださず 孤の訟を糺さずして利達をえ 亦貧 者の訴を鞫かず 29エホバいい給う われかくのごときことを罰せざらんや 我心は是のごとき民に仇を復さざらんや

30この地に驚くべき事と憎むべきこと行わる 31預言者は偽りて預言をなし祭司は彼らの手によりて治め 我民は斯る事を愛す されど汝等その終に何をなさんとするや

【エレミヤ６】

1ベニヤミンの子等よ エルサレムの中より逃れ テコアに笳をふき ベテハケレムに合図の火をあげよ そは北より災いと大なる敗壊のぞめばなり 2われ美 しき窈窕なるシオンの女を滅ぼさん 3牧者は其群を牽て此処にきたり その周囲に天幕をはらん 群はおのおのその処にて草を食わん 4汝ら戦端を開きて之を攻むべし 起てよ われら日午にのぼらん 嗚呼惜いかな日ははや昃き夕日の影長くなれり 5起てよ われら夜の間にのぼりて その 諸 の殿舎を毀たん 6万軍のエホバかくいいたまえり 汝ら樹をきり エルサレムに向 ka いて壘を築け これは罰すべき邑なり その中には唯暴逆のみあり 7源 の水をいだすがごとく彼その悪を流す その中に暴逆と威虐きこゆ 我前に憂と傷たえず 8エルサレムよ 汝訓戒をうけよ 然らざれば我心汝をはなれ 汝を荒蕪となし住む人なき地となさん

9万軍のエホバかくいいたもう 彼らは葡萄の遺餘を摘みとるごとくイスラエルの遺れる者を摘みとらん 汝葡萄を摘取者のごとく 屡 手を筐に入るべし 10我たれに語り誰を警めてきかしめんや 視よその耳は割礼をうけざるによりて聴こえず 彼らはエホバの言を嘲り これを悦ばず 11エホバの怒りわが身に充つ われ忍ぶに倦む これを衢街にある童子と集まれる年少者とに泄すべし 夫も婦も老たる者も年邁し者も執えらるるにいたらん 12その家と田地と妻はともに佗人にわたらん 其はわれ手を挙げてこの地に住める者を撃てばなりとエホバいいたもう 13夫彼らは少さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪者なり 又預言者より祭司にいたるまで皆詭詐をなす者なればなり 14かれら浅く我民の女の傷を医し 平康からざる時に平康平康といえり 15彼らは憎むべき事を為して恥辱をうくれども毫も恥じず また愧を知らず この故に彼らは傾仆る

る者と偕にたおれん 我来るとき彼ら躓かんとエホバいいたもう
16 **エホバかくいいたもう 汝ら途に立ちて見 古き徑に就て何か善道なるを尋**
ねて其途に行め さらば汝らの霊魂安きを得ん 然ど彼らこたえて我儕はそれに
行まじという 17我また汝らの上に守望者をたて笛の声をきけといえり 然ど彼
等こたえて我儕は聞かじという 18故に万国の民よきけ 会衆よかれらの遇うと
ころを知れ 19地よきけ われ災いをこの民にくださん こは彼らの思いの結ぶ果
なり かれら我言とわが律法をきかずして之を棄つるによる 20シバより我許に
乳香きたり 遠き国より菖蒲きたるは何のためぞや われは汝らの燔祭をよろこ
ばず 汝らの犠牲を甘しとせず 21故にエホバかくいいたもう みよ我この民の前
に躓礙をおく 父と子とそれに躓き 隣人とその友偕に滅ぶべし
22 **エホバかくいいたもう みよ民北の国よりきたる 大なる民地の極より起こ**
る 23彼らは弓と槍をとる残忍にして 憫なし その声は海の如く鳴る シオンの
女よ かれらは馬に乗り軍人のごとく身をよろいて汝を攻めん 24我儕その
風声をききたれば我儕の手弱り 子をうむ婦のごとき苦痛と劬労われらに迫る
25汝ら田地に出る勿れ また路に行むなかれ 敵の剣と畏怖四方にあればなり
26我民の女よ 麻衣を身にまとい 灰のうちにまろび 独子を喪いしごとくに 哀
みていたく哭け そは毀滅者 突然に我らに来るべければなり
27 **われ汝を民のうちに立てて 金を 験る者のごとくなし 又城のごとくなす**
こは汝をしてその途を知らしめ また試みしめんためなり 28彼らは皆いたく悖
れる者なり 歩行て人を謗る者なり 彼らは 銅 のごとく 鉄 のごとし 皆邪なる
者なり 29鞴は火に焚け 鉛はつき 鎔匠はいたずらに鎔す 悪者いまだ除かれ
ざればなり 30エホバ彼らを棄てたもうによりて彼等は棄てられたる銀と呼ばれん

●神の火の如き言

エレミヤの5章10節からです。

10 **汝等その石垣にのぼりて滅ぼせ**

「その石垣」というのは、エルサレムの石垣のことです。

悉 くはこれを滅ぼす勿れ

ちょっとこの10節は学問的に問題です。何か少しおかしいという、多少そんな感じがします。

その枝を截除け

「その枝」というのは葡萄の枝です。葡萄の樹はイスラエルの民を譬えて言っているわけですから。その選ばれて、ダメなやつは切り除いてしまえと。

エホバのものに有らざればなり

このことはキリストのヨハネ伝15章の葡萄の樹の譬えの中にもありましたね。自分に本当に連なっていないものは枯れてしまう。そんなものは切ってしまうという。

11 **イスラエルの家とユダの家は大に我に悖るなりとエホバいいたもう**

エレミヤは非常に烈しくこのイスラエルの信仰上の罪、また社会的ないろいろな混乱を忌憚なく攻撃するわけです。彼自身はそういうことをしたくない男なんですが、神さまに捉えられて仕方がない。

12 **彼等はエホバを認めずしていう エホバはある者にあらず**
災われらに来らじ

「エホバなんてものはいない」というわけです。

と言って昂然としているわけだ。

我儕剣と饑饉をも見ざるべし

そんなものには遭わないであろうと。

13 **預言者は風となり**
言はかれらの衷にあらず 斯彼らになるべしと

あるいは「風となるべし」、

と言って、非常に不信の傲慢な言葉を発しているわけです。この場合の「風」というのは非常に虚しいことをいう風です。伝道の書に、

「風を捕らえるがごとし」

とあるが、あの「風」も虚しいという意味です。また、「風」は別に全然虚しくない「霊」の意味にとることもありますけれども。

14 **故に万軍の神エホバかくいいたもう 汝等この言を語うにより視よ われ汝の口にある我言を火となし 此民を薪となさん その火彼らを焚尽すべし**

口語訳ではそこのところは、

「14 **それゆえ万軍の神、主はこう言われる、「彼らがこの言葉を語ったので、見よ、わたしはあなたの口にあるわたしの言葉を火とし、この民をたきぎとする。火は彼らを焼き尽す**」。

とある。この訳はあまり感心しない。原文を見ますと、

「見よ、われ与えん、わが言を汝の口に火となるように」

これが直訳です。だから、

「見よ、私はお前の口の中に私の言を与えるぞ、それが火となるように」

と。「to the fire」の、英語の「to」の、結果となるような、目的と結果が同じような、「火となさん」と訳したっていいけれども、「なさん」ということは、

「与えて火とするぞ」

ということです。だから、

「お前の口の中に私の言を与える。そうしたら必ずそれは火となるぞ」

それが本当の意味です。要するに、神の言は火の如き言。これは非常に注目すべき言葉で、今日は実はこの５章14節と６章14節が――不思議なことに14節と14節ですが――その二つを私はグッと捉えて、そして「平安何処にか在る」という題にした。

「地水火風」というが、この「四大」です。私は、人生の真理はこの四大だけでたくさんだと思う。もうその他は要らない。地水火風を冥想し、身体につけて生きれば、もう宇宙的な人間になる。なぜ、みんな七面倒くさいことばっかりを考えているかと。何も論理を私はけなすわけではないですよ。もちろん論理も大事な役割はある。だけれども、超の世界はね〔最も大事です〕。

●超イズム

実は昨日は、私は中高の入学式で一席やってしまった。ちょうど後ろに日本の国旗が掛けてあったから、太陽を題材にして語った。

「もう入学式にこのことを語ったから、君たちは絶対に忘れるな。世界の超偉大なる人物は、

と、そういう言い方は初めてだ。キリストのことだよ。

超偉大なる人物が、「汝らは世の光なり」と言った。

「光と成れ」とはキリストは言わなかった。「光なり」と現在の事実として言っている。福音の世界は、「汝ら」は、本当は「汝」ということ。一人びとりは「汝は」といって受けとらなければダメです。一人称単数現在で受けとらなければ、本ものにならない。

「光となれ」でなくて、「光である」と言う。光であるためには、一体どうしたらいいのか。「君たちは空気である」と言ったら、みんなびっくりするだろう。即ち、空気に囲まれ、空気を吸って、空気でもって血は常に絶えず浄化されて、もう空気とは離すことができない。地水火風の風だよ。この風も、気も、これほどに密接な関係で、無意識に空気とは一緒になっている。これが本当の一如のすがた。だから、「空気なり」といえる。「我は風なり、我は気なり、我は空なり」といえる。それだけ大気が楽しくてしょうがない。都会の大気は汚染されている。この肉体もこの風で生きているんだが、しかしながら、これは今度は霊と通ずるんだから、ルーアッハ、プニューマ、ガイスト、ハウッホ、ルフト、これがみんな。今度は、魂が霊気を本当は吸っているわけだ。だから、「汝らは霊なり、霊止なり」という。霊が止どまっているものを霊止という。」

と、このことも言ってやった、昨日の入学式で。

霊止であるということ。ちっともこの頃は霊止がいなくなってしまった。というのは、霊の止どまっているひとがいないから、霊止がいない。

「人多き人の中にも人ぞなし」

と、本居宣長だったか、言ったでしょ。ソクラテスも本当の人がいるかと思って、昼間に昼行灯（あんどん）でもって辻に立って人を見ていた。

「あなたは何を捜していますか」

「人を捜している」

「たくさんいるではないですか」

「一人もいない」

と。本当の霊止（ひと）は一人もいないという。

何も難しくない。本当の世界に本来あるのに気がつかないで、そこから抜けてしまっているから、とんでもない話だ。太陽の光を浴びているではないか。光をうちに浸透させられているではないか。だからキリストは、

「私がいれば、キリストという私は世の光であるから、それと一つになって、それを浴びていれば、光である」

と言う。

「光であるから、いよいよ光となれ」

と、今度は逆になる。「光でないから、光となれ」といったって、これは無理なんだよ。

「光であるのだから、いよいよ光となれよ」

ということ。

「救いは来ているから、いよいよ救いを求めよ」

と。パウロの追求はそうです。いわゆる浪漫主義でも理想主義でもない。もっとも凄い現実です。最も凄い現実をいただいているから、浪漫主義であろうと、理想主義であろうと、みんなそこから出てくる。単なる主義ではない。全部これをひっくるめて、超イズムですよ。超イズムの世界に福音の世界の人たちはあるのに、それで何をボヤボヤしているか。どんな行き詰まった現実がきても絶対に負けてはいかんですよ、あなた方は絶対に。

「どうも、私は今、結婚問題で困ってしまった」

なんて、何を困るか。勝ってくださいよ、必ず。けれども、大丈夫です。その問題があればあるほど、望みは偉大であります（笑）。なにさま、この福音にきて、くすぶっていたらダメですよ。それはこの「なり」の世界を本当に受けとっていないから。もう私は話にならないんです、正直、燃えているから。

「である」世界なんです。大体、「である」なんてことはヘブライ語では言ったり言わなかったりする。「我は光である」も面倒臭いものだからね、

「われ光」

というような言い方をする。

「私の言葉を与えるから、そうしたら、お前の中で光となるぞ。光が現ずるぞ」

ということ。まぁ、話は、私はしゃべりだすと、また脱線したり、また途中で止めたりね、そういうことの気合がわかるかね。

●火と光

火です。もう少し「火」をやろうかな。出エジプト記の13章20節。もう今日はエレミヤの5章14節と6章14節をやれば、あとはいいんだよ、読まなくたってね。あとは自分で読んでおいてください。

「20**斯てかれらスコテより進みて曠野の端なるエタムに幕張(まくはり)す　21エホバかれらの前に往きたまい　昼は雲の柱をもてかれらを導き　夜は火の柱をもて彼らを照して　昼夜往きすすましめたもう　22民の前に昼は雲の柱を除きたまわず　夜は火の柱をのぞきたまわず**」（出エジプト13・20～22）

という素晴らしい句がある。これは民数記略にも申命記にも並行の記事があります。雲の柱、火の柱という。もちろん霊火であります。イスラエルの神と火は非常に関係がある。大体、モーセが呼ばれた時も、出エジプト記3章、柴が燃えているがちっとも燃え尽きない。どういう火だろうと、近づいたところが、この霊火が燃えているわけです。

「ここは聖なる処だから、靴を脱げ」

と。モーセは平伏して、「モーセよ、モーセよ」という声を聞いた。あれが霊火であります。あの「十誡」の映画で、モーセの十誡の言がスーッと炎が飛んできて石板に焼き付けるようにしたね、あれはなかなか素晴らしい発想だと思う。そういう火のごときもの。もちろん象徴的です、「火」という言い方は。霊が非常な光を持っているから。

それは火と言おうが、光と言おうがいい。大体、火という字と光という字は似ているんだ。「火」に横棒を一本入れると「光」になる。

ここにたくさん花があるね。これが光みたいなものです、花が。花は非常に明るいでしょ。「花」という字がまた「光」に非常に似ている字です。チューリップはまっ赤だね。もちろん私は、赤はへたすると赤い思想の方に通ずるから、あまり感心しない面もあるけれども。同じ赤でもどす黒いような赤、あれはサタンの方に通ずる、黒みをおびた赤は。けれども、黄色い、黄金色をおびた赤、これは天的な赤です。同じ赤でもちがう。

私は実は昨日の朝――よく朝起きがけにあるんだね――冥想していたら、グーッと太陽が昇ってきた。「ああまるで日蓮さんみたいだな」と思った。そういうことがある。

同じことが出エジプト記14章24節に、

「24**暁(あかつき)にエホバ火と雲との柱の中よりエジプト人の軍勢を望み　エジプト人の軍勢を悩まし**」（出エジプト14・24）

云々と。これは正に出エジプトのあの凄まじい光景が14章が語っているところです。それから、モーセが十誡を戴く前に、「シナイの全山が云々」というのは、出エジプト記19章18節、

「18 **シナイ山都(すべ)て煙を出(いだ)せり　エホバ火の中にありて　その上に下りたまえばなりその煙竈(かまど)の煙のごとく立ちのぼり　山すべて震う**」（出エジプト19・18）

と書いてある。

私は「霊灯万里」という詩を書いたでしょ。あの中に、

「日本は火山国である。日本人は本来火の如き、胸に火を宿すような民であるべきはずなんだ」

というようなことを私は歌ったはずですよ。時に私はあれを読み返すと、まぁよくこれだけもの凄く書いたものだと思う。あれは一気呵成に書いたんですよ、一晩で。ほとんど徹夜して。興が乗ってくると、グーッと行きますからね。あとから多少は推考したけれども。

〔註：著作集第８巻『詩歌集』／二、警世詩集／「霊燈萬里」――１９５３年９月１日　関東大震災三十周年の夜作〕

今日は――私は昨日からローマ書を書いていて――本当は、「もう集会はよそうか」なんて思ったんだけれども、まぁ仕方がない（笑）。今度は「ハレルヤ」はローマ書です〔35号（１９７４年４月）「キリスト者の信望愛」――ロマ書第８章――第６回春期福音特別集会（１９７４年３月23～24日、伊豆高原浮山荘にて）〕。もちろん概要だけれども――概要といったって、私はいわゆる概要なんて下らない――「下らない」ということはないけれども――そういう書き方をしない。いくら概要でも、そこに炎していなかったらば、そういう無駄な文章は自分でおそらく書いたことはないはずです。そんなものを書いた時には、私はもう観念にズレた時には破ってしまうから。そんな観念で誤魔化してただ頁数をつくっても何もならないんだ。

それから、詩篇の18篇７節、

「7 **このときエホバ怒りたまいたれば　地はふるいうごき　山の基はゆるぎうごきたり　8 烟(けむり)その鼻よりたち　火その口よりいでてやきつくし　炭はこれがために燃えあがれり**」（詩篇18・７～８）

なんて妙なことが書いてある。これは神さまを擬人化してこんな言い方がしてある。

「火がその口から出た」

という。昔の人ですから、かなりそういう神さまを擬人的に描いてはいるけれども、決してイスラエルではそれを偶像にしなかったということが良かったわけです。表現としては随分大胆な表現をするわけです。

「神さまの口から火が燃えている」

という。

本当に霊に燃えていると、手の先からビーッと霊的な光が、波動が出ているんです。これはもう確かです。それでなければ、按手でもって霊が伝わるということはないわけです。

近頃、念力なんてやっているね、あれも相当なもんだな。あれには恐れいったね、小さ

な子供がお匙に「右に曲がれ」と言うと曲がってしまうし、「左に曲がれ」と言うと左に曲がってしまう。大変なもんだね、あれは。あれは確かに或る霊的な波動が行って、もの凄いエネルギーが行って、物質を分解するんだね。そういうように念じて祈ると、そのような波動が直ちに動くというんだから、大変なもんです。だから、キリストが、

「わが言は霊なり生命なり」

と言われたのも、あんな現象からもはっきりわかる。意味ではないぞという。

〔註：スプーン曲げは、金属製のスプーンを撫でたり息をふきかけたり空中に投げ上げただけで、さじの首の部分がぐにゃぐにゃに曲がってしまうというパフォーマンス。ユダヤ人のユリ・ゲラーがテレビのワイドショーで実演、これにより「超能力」という言葉が流行語になった。１９７４年には日本にも訪れ、１９７４年3月7日放送「木曜スペシャル」で実演し大センセーションを巻き起こした。この番組により沢山の少年少女が超能力に目覚めたとされ、スプーン曲げのパフォーマンスがマスコミに取り上げられる。（ウィキペディアより）〕

●神の審判の火

イザヤ書10章16節に、

「16 **このゆえに主万軍のエホバは肥たるものを痟しめ　且その栄光のしたに火のもゆるが如き火焔をおこし給わん　17 イスラエルの光は火のごとく　その聖者はほのおの如くならん**」（イザヤ10・16～17）

「イスラエルの光」というのはエホバの神さまのことです。「その証者」というのもエホバの神さまです。「イスラエルの光」と「その証者」というのは対句になっている。

「火のごとくほのおの如く」

というのは、神さまが「火のごとく炎のごとく」それ自体が光である。「イスラエルの光」とはっきり言っている。

「我は光なり」

なんです。17節は大事な句ですから。

みんな毎日、聖書を読んでいるでしょうね、しっかり御言を喰らっていってくださいよ。

それから今のエレミヤにはかなり出ている。15章14節、これは怒りの火だ。

「14 **われ汝の敵をして汝を汝の識らざる地にとらえ移さしめん　夫我怒りにより　て火燃え　汝を焚かんとするなり**」（エレミヤ15・14）

そういう意味で、17章４節、

「4 **わが汝にあたえし産業より汝手をはなさん　又われ汝をして汝の識らざる地に於て汝の敵につかえしめん　そは汝ら我をいからせて　限りなく燃える火を発したればなり**」（エレミヤ17・４）

神さまは、審判の怒りの火が燃えてしょうがないんです。それから、21章10節、

「10 **エホバ　いいたもう　我この邑に面を向けしは　福をあたうる為にあらず**

禍をあたえんが為なり この邑はバビロンの王の手に付されん 彼火をもて之を焚くべし」（エレミヤ21・10）

これが神さまの審判の意味の火です。それから、20章9節はまた大事な言葉です。

「9**是をもて我かさねてエホバの事を宣ず 又その名をもてかたらじといえり 然どエホバのことば我心にありて 火のわが骨の中に閉じこもりて燃ゆるがごとくなれば 忍耐につかれて堪難し」（エレミヤ20・9）**

言わざらんと欲するとも出来ない。神さまの言葉が火のようになって私の中で燃えているものだからと。これは非常に著しい言葉ですね。

「聖書に酔ってしまっている」ようなことを、さっき私のことを言いましたが、エレミヤの23章9節にそのことが書いてある。

「9**預言者輩のために我心はわが衷に壊れわが骨は皆震う 且エホバとその聖言のためにわれは酔える人のごとく 酒に勝たるる人のごとし」（エレミヤ23・9）**

「幼児と酔っぱらいは本当のことを言う」というんだけれども（笑）。酔っぱらいにも二通りありましてね、酒に酔っているのと、神さまの御言に酔っているのと。このエレミヤがここでもってそれを言っているわけだ。また、わざわざ酔ったような振りして勝手なことを言うやつがある。そんなのはいけませんけれども。非常にエレミヤという人はいい意味における人間性の豊かな深いひとです。そして、神さまと取っ組んでやっていることを正直に告白している。ただ神の言葉を伝えているばかりでない。

●我は四大なり

それで、元に戻ります。

14**故に万軍の神エホバかくいいたもう 汝等この言を語うにより視よ われ汝の口にある我言を火となし 此民を薪となさん その火彼らを焚尽すべし**

「エホバは焼き尽くす火だ」という言葉はよく申命記にも出てましたね。というのは、罪の事態に対してはどこまでも審判。と同時に今度は、本当に救いの火として。火にも二通りの作用があるわけだ。滅ぼす火と、また救い上げる火と。

救い上げる火でもの凄いのは、何といってもペンテコステの使徒行伝の、

「聖霊、火の如く臨んだ」

というあの火です。風の如く、火の如く。聖霊は風の如く、火の如く、水の如くだから、みんなこの聖霊に関連してくる。火は愛です。

大地は一切のものを荷なっているから、「大地となれよ」ということは、

「荷いの愛の人となれよ」
ということ。清濁合わせ呑んでしまう、全部。そして溶かしてしまう。だから、地水火風という。これでもう宇宙的な、
「我は四大なり」
と言えるんだ。「我は四大なり」と言い切れたらエライことだよ。言い切れますよ、キリストにあれば。キリストは四大の如きひとだもの。
「四大とは何ぞや。キリストなり。またキリスト者なり」
と。誰も言わないじゃないかまだ、そんなことを。
手島さんはあまりギリシア語やヘブライ語を勉強し過ぎてしまって、かえってこだわっているから私は、
「ギリシア語やヘブライ語も相対的なものですよ。もうひとつ奥の世界をつかめ」
と言う。これは無教会が一生懸命でギリシア語ヘブライ語をやるものだから、ついその癖が出るわけです。私はそういうな癖はもうない。大体、段々勉強が面倒くさくなってきた(笑)。あなた方は面倒くさくてはいかんよ、今はあなた方はコツコツやらなくてはいけませんけれども。

●偽りの預言者といい加減な祭司ばっかり

5 エホバいい給う イスラエルの家よみよ 我遠き国人(くにびと)をなんじらに来らしめん
其国は強くまた古き国なり
其語ることをも暁(さと)らざるなり 16 その箙(えびら)は啓(ひら)きたる墓のごとし
汝等その言をしらず
これはスクテアのことではないようです。
というのは、致命的な凄い矢だということですよ、その箙(えびら)からとられる矢は。
彼らはみな勇士なり
あるいはスクテアかもしれないけれども。ちょっと「古き国なり」というのがピンとこないわけです。
17 彼らは汝の穡(かりい)れたる物と汝の糧食(くいもの)を食(くら)い 汝の子女(むすこむすめ)を食い 汝の羊と牛を食い 汝の葡萄の樹と無花果の樹を食い また剣をもて汝の頼むところの堅き邑(まち)を滅ぼさん
まぁ大変なことだ、みんな食われてしまったら。
18 されど其時われことごとくは汝を滅さじとエホバいいたもう
学者はこれはまた後代の挿入だとも言いますけれども、必ずしもそうまで言わなくてもいいのではないかと思います。
19 汝等何ゆえにわれらの神エホバ此等の諸(すべて)のことを我儕になしたもうやと

いわば 汝かれらに答うべし 汝ら我をすて汝らの地に於て異なる神に奉えしごとく汝らのものにあらざる地に於て異邦人につかうべしと

そういう捕囚となることを預言しているわけです。これはその通りになってしまった。

20 **汝これをヤコブの家にのべ またこれをユダに示していえ** 21 **愚かにして了知なく 目あれども見えず 耳あれども聞こえざる民よこれをきけ**

イザヤも同じようなことを言ったね。

「目あれども見えず、耳あれども聞こえず、心あれども悟らず」

なんていうのがたくさんいるわけだ、今でも。

22 **エホバいい給う 汝等われを畏れざるか 我前に戦慄かざるか 我は沙を置きて海の界となし これを永遠の限界となし 踰ることをえざらしむ 其浪さかまきいたるも勝つことあたわず 澎湃もこれを踰るあたわざるなり**

同じような言葉がヨブ記38章10節にあります。

「神さまは自然界に限界を置く」

というようなことを。なかなかエレミヤもよく自然を見てますから。

「われを畏れざるか 我前に戦慄かざるか」

と。昨日も私は、

「今の若い人たちは本当の畏るべきものを知らん。神仏に対する敬虔な気持をまず持たなかったら、人間ではないぞ」

とはっきり言ってやった。今はしかしそういうことを言う校長はないらしいね。みんないい加減にボカしている。ダメですよ、本当に権威をもって言わなかったら。

23 **然るにこの民は背き 且悖れる心あり 既に背きて去れり** 24 **彼らはまた我儕に雨をあたえて秋の雨 と春の雨を時にしたがいて下し**

10月や11月の雨です。

「先の雨」というのが「秋の雨」のことです。「後の雨」というのは「春の雨」のこと。他によくそういう言い方をしてあるでしょ。「後の雨」というのは即ち、秋から春にかけてというわけで、秋の雨が先の雨で、こちらとちょっと気候が違いますから。春の雨というのが後の雨で、3、4月の雨です。秋の雨と春の雨を季節に従ってくだし、

我儕のために収穫の時節を定め給える我神エホバを畏るべしと其心にいわざるなり

そういうことを言わないと。

25 **汝等の愆はこれらの事を退け 汝等の罪は嘉物を汝らに来らしめざりき**

豊作のことです。

26 **我民のうちに悪者あり 網を張る者のごとくに身をかがめてうかがい 罟を**

置きて人をとらう 27樊籠に鳥の盈つるがごとく不義の財彼らの家に充つ この
故に彼らは大いなる者となり富める者となる 28彼らは肥て光沢あり 其悪き
行は 甚し 彼らは 訟 をたださず 孤 の訟を糺さずして利達をえ 亦
貧 者 の訴を鞫かず 29エホバいい給う われかくのごときことを罰せざらんや
我心は是のごとき民に仇を復さざらんや
30この地に驚くべき事と憎むべきこと行わる 31預言者は偽りて預言をなし
祭司は彼らの手によりて治め 我民は斯る事を愛す されど汝等その終に何をな
さんとするや

もうどうにも仕様がなくなってしまうだろうと。そんなに神さまは

「預言者も祭司もダメだ、偽りの預言者といい加減な祭司ばっかりだ」

と、まぁ要するに全体がダメだと言って嘆いているわけです。

●エレミヤは売国奴みたいに思われる

第６章に行きます。

1ベニヤミンの子等よ
エルサレムの中より逃れ テコアに笳をふき ベテハケレムに合図の火をあげ
よ

エレミヤもベニヤミンの族の一人です。

「ベテハケレム」とは、「ベート」というのは家、「ケレム」は葡萄園のことですから、「葡萄園の家」という意味です。狼煙をあげろというんです、スクテアがやってくるから。

そは北より災いと大なる敗壊のぞめばなり 2われ美しき窈窕なるシオンの 女
を滅ぼさん

ということは、「シオンの女」をもってエルサレムの民をいう。ただ女の子ばかりではない。女の子ばかりを滅ぼすという意味ではない。即ちエルサレムを滅ぼすということ。

3牧者は其群を牽て此処にきたり その周囲に天幕をはらん 群はおのおのその
処にて草を食わん

「草を食らわん」というのは、イスラエルの民をやっつけてしまうことです。そういう隠された意味を持っている。

汝ら戦端を開きて之を攻むべし 起てよ われら日午にのぼらん 嗚呼惜いかな
日ははや昃き 夕日の影長くなれり

なんてなことを彼らが言うということですよ。

5起てよ われら夜の間にのぼりて その 諸 の殿舎を毀たん

敵がそう言うから、そこで、

6万軍のエホバかくいいたまえり 汝ら樹をきり エルサレムに向いて壘を築け

これは罰すべき邑なり その中には唯暴逆のみあり
万軍のエホバは敵にむしろ味方して、こんなことを仰るという。とんでもない話なんです。だから、エレミヤはまるで売国奴みたいに思われるわけだ。「お前は本当に愛国か」なんて言われる。

7 **源の水をいだすがごとく彼その悪を流す**
これは神さまがそう言っている。もうエルサレムの、イスラエルの悪はしょうがないと。

その中に暴逆と威虐きこゆ 我前に憂と傷たえず 8 エルサレムよ 汝訓戒をうけよ 然らざれば我心汝をはなれ 汝を荒蕪となし 住む人なき地となさん

9 **万軍のエホバかくいいたもう 彼らは**
敵の将軍たちは、

葡萄の遺餘を摘みとるごとくイスラエルの遺れる者を摘みとらん
その通り、徹底的にやっつけられるぞと。

汝葡萄を摘取者のごとく 屡 手を筐に入るべし 10 我たれに語り誰を警めてきかしめんや 視よその耳は割礼をうけざるによりて
というのは心の割礼ですけれども、

聴こえず 彼らはエホバの言を嘲り これを悦ばず 11 エホバの怒りわが身に充つ われ忍ぶに倦む
これはエレミヤがよく使うような言い方です。

これを衢街にある童子と集まれる年少者とに泄すべし 夫も婦も老たる者も年邁し者も執えらるるにいたらん 12 その家と田地と妻はともに佗人にわたらん 其はわれ手を挙げてこの地に住める者を撃てばなりとエホバいいたもう
神さまはそんなにも罰するぞと。

13 **夫彼らは少さき者より大なる者にいたるまで皆貪婪者なり**
即ち、卑賤なる者から位の高い者にいたるまで、どうにもならん。

又預言者より祭司にいたるまで皆詭詐をなす者なればなり
これはよっぽどひどかったとみえるね。

●神言常燃の霊止
そして6章14節、

14 **かれら浅く我民の女の傷を医し**
「我民の女」というのは要するにイスラエルの民のことをいう。

平康からざる時に平康平康といえり
この訳もちょっと私は感心しない。「平安」です。

「傷を浅く癒して平安平安と言うけれども、一向平安はない」

と訳した方がいい。「平和なき時に」ではない。

「平安平安と言うけれども、一向に平安はやってきませんよ」

ということ。まぁそういうところはやっぱり原文が読めると、重宝なわけですけれども。民の破れ、「傷」というのは「破れ」という字で、非常にダメになってしまっていることです。「滅亡」という意味も持っている強い字です。わが民の破れを浅く癒して、しかもこう言う、「平安、平安」と。だけれども、「シャーローム」がない。平安がない。だから、「平安何処にか在る」という今日の題はこの14節からきたわけです。

要するに、神さまを離れて、神の言をけなして、神さまの行為を嘲っている、そういったところに平安はありっこない。「平和」では意味をなさない。「平安」なんです。だから、神の言が魂のうちに――さっきエレミヤが言ったように――燃える。

「わがうちに燃える火の如く」

という。即ち、

「神の言はわが胸のうちに、心のうちに――常燃する、常に燃えている――常燃するところに平安がある」

という結論になるわけです。５章14節と６章14節を私は組み合わせると、そういうことになってしまった。

「神言の常燃するところに平安あり」

と。神言が常燃しているところはどこですか。聖書そのものが第一そうです。聖書は神言が常燃している。あなた方はこの聖書に触ったら、「熱い！」と言わなくてはダメです、「これは熱くない」なんて言っているうちは。熱くてこれは触れないですよ、本当は。そういうような神の言がそこから常燃して――それから今度は聖書ではない――自分自身が聖書となる。自分自身が聖書となって、神の言となって、キリストはこの神の言であった。

「太初（はじめ）に言（ことば）あり、言は神と共にあり」

という。あの「共にあり」はうまくなかったね本当は。

「神の中（うち）にあり」

とやっておけばよかった。神のうちにあり、神の中にありと。

「神と一つであった」

ということなんだよ。私のヨハネ伝はそういうように書こうかな。

そういうように、神言常燃のところに、私たちの存在の中に神の言が焼きついている。あなた方は天界へいくときには、聖書も持っていくわけにいかんよ、聖書がもう身についていなければ。神の言が身について、もう聖書を卒業というのはそういうことだよ。神言を本当に身につけている。ローマ書８章くらい、誰かペンテコステまでに暗記したらいいだろう。そういうのが身について焼きついている。大事な言葉はしっかりつかまえている。そこには直ちに光だから、闇は照らしてしまう。何が来たって恐くない。運命環境どうな

ろうとも、絶対に退かん。

まぁ今日の集会に来させてあげたい人があるんだけれども。あなた方も、その来させてあげたい人があるでしょ。ちゃんと電話なり手紙で言ってあげなさい。

「今日はもう大勝利のことを聞いたぞ」

と。そういう神言常燃の霊止となる。そういうひとでなければ平安はない。平安というのは本当の力を持っている。何が来てもびくともしないんだから、ダルマさん以上なんだ。

エレミヤ自身は弱い男だったけれども、どうして彼はこんなもの凄い勇者と成っているかというと、本当に神の言が彼の中でもの凄い力となって、光となって、生命となっていたからです。パウロさんがその通り。本当に文字通り万難を排して突貫できた。キリストが本当に、御霊なるキリスト、聖言なるキリストが彼の中に化体していた。人生はもうこの一点をしっかり持っていれば、何がどうなったっていいですよ。ええ。もうみんなが抱きついてきますよ。そしたら、その抱きついたやつがみんな治ってしまう。

「あの人に触れれば治ってしまう」

と。魂も身体も。何もくすぶっている必要はない。勿体なくてしょうがない。

エレミヤの5章、6章というのはあまり面白くないところだなぁと、始めは読んでいたんだけれども、そのうちに光が来てしまった（笑）。そういうもんです。必ず何かつかみだしてしまう。

●聖霊の火が常燃するところに平安あり

15 **彼らは憎むべき事を為して恥辱をうくれども毫も恥じず　また愧を知らず**
この故に彼らは傾仆るる者と偕にたおれん　我来るとき彼ら躓かんとエホバいいたもう

その通り。この16節も面白いところだよ。

16 **エホバかくいいたもう　汝ら途に立ちて見**
「途に立ちて」というのは――これは複数で書いてある――岐路みたいな所だ。別れ途です。
古き徑に就て何か善道なるを尋ねて其途に行め

古い途と新しい途といろいろあるだろうけれども、古き途には善き道がある。それが本当の常に新しい道である。本当のものは古くして新しい。

「古きを尋ねて新しきを知れ」

とかある。だから、道の民だ日本人は。日本の昔のものを読むと、感心するですよ正直。まぁ、小野田さんなんて大騒ぎしたけれども、あの小野田さんという人もやはりあるひとつの魂の姿勢がピシャッとしたものがあった。これが人を打ったんですよ、要するに。

〔註：小野田 寛郎（おのだ ひろお、1922～2014年）は、情報将校として太平洋戦争に従軍しゲリラ戦を展開、第二次世界大戦終結から29年を経て、フィリピン・ルバング島から日

本へ帰還した。（ウィキペディアより）」

もう聖書の中にきたら、本当の平安と、それから本当の自由自在というところがあります。

さらば汝らの霊魂安きを得ん

と書いてある。本当に古い道の善き道にはたと気がついて、そこに行ってみると、そしたら、平安があるぞと。聖書という古道にきたれ。聖書は正に古道、古き道だ。旧道だ。東海道も旧道の方が面白い。新道はダメだ。……

然ど彼らこたえて我儕はそれに行まじという 17我また汝らの上に守望者をたて笳の声をきけといえり 然ど彼等こたえて我儕は聞かじという 18故に万国の民よきけ 会衆よかれらの遇うところを知れ 19地よきけ われ災いをこの民にくださん

万国の民に呼びかけたり、地に呼びかけたり、会衆に呼びかけたりしている。

こは彼らの思いの結ぶ果なり かれら我言とわが律法をきかずして之を棄つるによる 20シバより我許に乳香きたり

アラビアの南の方ですね。

遠き国より菖蒲きたるは何のためぞや

「遠き国」はインドかどこか。「菖蒲」というのは「カーネ」という非常に香りの高い花だそうです。

われは汝らの燔祭をよろこばず 汝らの犠牲を甘しとせず

心でないものは、いくら燔祭なんかしてもダメだと。偽善な祭司宗教というわけだ。

21故にエホバかくいいたもう みよ我この民の前に躓礙をおく

というのは、北からスクテアがやって来ること。

父と子とそれに蹶き 隣人とその友偕に滅ぶべし

22エホバかくいいたもう みよ民北の国よりきたる 大なる民地の極より起こる 23彼らは弓と槍をとる残忍にして 憫なし その声は海の如く鳴る

というのは、もの凄い鬨の声だ。

シオンの女よ かれらは馬に乗り軍人のごとく身をよろいて汝を攻めん 24我儕その風声をききたれば我儕の手弱り 子をうむ婦のごとき苦痛と劬労われらに迫る 25汝ら田地に出る勿れ また路に行むなかれ 敵の剣と畏怖四方にあればなり

四方八方からやって来ると。

26我民の女よ 麻衣を身にまとい 灰のうちにまろび 独子を喪いしごとくに哀みていたく哭け そは毀滅者 突然に我らに来るべければなり

そういうことだから大変だぞと。神さまの言葉です。

27われ汝を民のうちに立てて

というのは、エレミヤに向かっている。

金を験（こころむ）る者のごとくなし 又城のごとくなす こは汝をしてその途を知らしめ
また試みしめんためなり 28彼らは皆いたく悖（もと）れる者なり 歩行（あるき）て人を謗（そし）る者な
り 彼らは銅（あかがね）のごとく 鉄（くろがね）のごとし 皆邪（よこしま）なる者なり 29鞴（ふいご）は火に焚（や）け 鉛はつ
き 鎔匠（とかすもの）はいたずらに鎔（とか）す 悪者いまだ除かれざればなり 30エホバ彼らを棄て
たもうによりて彼等は棄てられたる銀と呼ばれん

そういった惨憺たる滅びとなるという。

それで、この神さまの火は、不信に対する焼き尽くす火であると同時に、また先程言いましたところの、本当に光となり、生命となるところの火である。

そこで、キリストがルカ伝12章で一番先に言われた、

「この火燃えたらんにはまた何をか要せん」

という火はそれであります。「この火燃えたらんには」というのは聖霊のことです。

「聖霊の火が燃えたらんにはもはや何をか要せん」

と。私たちの中には、この常燃の火は即ち聖霊ですから、

「聖霊の火が常燃しているところには本当の平安がある」

ということになるわけです。そういう意味において、ペンテコステがまた各自の上に火が臨んだ。我々はいつなりとも常に新たにペンテコステを受けながら進んでいく。どうぞ、

「私の中には今、火が燃えてません」

なんてことでないように。どんなことがあっても、火は燃える。何でもないです、火が燃えるひとつの要素は何かというと、祈りです。祈りは何かといえば、自分の全身をキリストの中に投げ入れること。何かお願いすることではない。自分を火そのものの中に投げ入れれば、火となるではないですか。キリストという驚くべ火の中に自分を

「主さま！」

と言って投げ込めば、それが祈りなんだ。そしたら、聖霊の火は直ちにわがうちにきたりたもう。そのことを日常の生活でいろんなことにでっくわしては、必ず体験してくださいよ。

「どうも、私は今日もダメだ」

なんて。ダメな時こそいいんじゃないですか。え？

「最悪は勇者にとって最善なり」

と、ブラウニングが言ったじゃないですか。最悪を最善にしていくものはこの聖霊の福音のほかにないです。おわります。

讃美歌355番「主をあおぎみれば」を歌いましょう。